

# リハビリパンツの装着・破棄に困難さを感じているパーキンソン病患者へのアプローチ

広瀬 彩乃<sup>1)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 リハビリテーション部

[はじめに] 症例はパーキンソン病 (PD) を呈し、就寝前のリハビリパンツ (リハパン) 装着と起床後のリハパン破棄に長時間を要していた。破棄では転倒頻回となり家族の介護負担感が増加した。自助具作成と動作練習を行い、時間短縮し破棄が自立に至ったため報告する。

[事例紹介] **症例** 60 歳台・女性 **重症度** Yahr4 **現病歴** X 年動作緩慢さ出現。X+6 ヶ月 PD の診断。以後在宅サービスとレスパイトケア入院を利用。X+15 年リハビリ目的で 1 ヶ月間当院入院。**既往歴** 変形性側弯症 **家族構成** 長女と同居。**在宅生活** リハパン破棄以外の ADL 自立。1 回/日以上転倒。日中はトイレ、夜間はパット内排泄。就寝前に自力でリハパンを装着するが長時間を要す。起床後はトイレでリハパンを自力で破棄していたが転倒が増えたため介助を要す。**主訴** リハパンの破棄・下衣操作が大変。**家族主訴** 早朝出勤のため介助は負担。

[初回評価] **ROM** 頸部・脊柱制限あり **MMT** 両上肢 3~4 **腱反射** R/L: 二頭筋・三頭筋 (+/++) **病的反射** R/L: ホフマン (-/-) トレムナー (+/+) **握力** R/L: 14.6 kg/14.7 kg **FBS** 41 点 **MMSE** 29 点 **TMTA** 238 秒/B385 秒 **FIM** 95/126 点 (運動 63 点、認知 32 点) **リハパン操作** 装着: 座位は円背、脊柱右凸側弯、重心は左偏位し左手は座面を支持。全身過緊張で上肢操作は拙劣であり、リハパンに左足部を入れる・パットを挿入する動作に 1 時間要し疲労感強い。破棄: 転倒頻回。リハパンの横を切りリハパンとパットを別々に引抜く動作に 1 時間要し疲労感強い。ゴミ袋に捨てる動作で介助要す。

[問題点] リハパン装着・破棄に長時間を要し、破棄では転倒あり介助要す。家族の介護負担感が強い。

[退院時目標 (2W)] リハパン装着・破棄の時間短縮と、破棄の自立。

[治療プログラム] ① リハパン装着・破棄の動作方法検討と自助具作成 ② 動作練習

[介入経過] C 字のプラスチック板を作成しウエスト部分に沿って挿入することで、リハパンに左足部を入れる動作の時間短縮あり。反復練習を行い、動作定着を図った。また、予めリハパンへパットを装着し、リハパンの横に切り込みを入れたことで、装着・

破棄の時間が短縮した。ゴミ袋を箱へ変更して位置を調整し、家族へ紙面にて情報提供した。

[最終評価]※変化点のみ記載 FIM98/126点（運動 66点、認知 32点） リハパン操作

装着：自助具を使用し5分で装着可能となり疲労感軽減。破棄：引抜き動作が10分で可能となり疲労感軽減。ゴミ袋を箱へ変更し位置を近づけることで転倒なく自立。

[考察]塚原<sup>1)</sup>は進行期のPD患者において巧緻性の問題が生活に支障をきたし、「それぞれの巧緻性を補う福祉用具・自助具で安全性を確保することに重点がおかれるべきである。それにより介助量が軽減できる。」と述べている。症例においては、上肢操作の難易度を下げるべく自助具を検討した。装着では左足部をリハパンのウエスト部分へ入れる動作に長時間を要していた。これは、姿勢異常による左臀部への重心偏位により左足部の挙上が行えないことと、姿勢異常による全身の過緊張から巧緻動作を含む上肢の操作性が低下し、ウエスト部分を十分に広げることが困難なことが影響していた。そこで、ウエスト部分に沿ってプラスチック板を挿入してウエスト部分を広げ、上肢操作の難易度を下げた。プラスチック板は、認知機能低下を考慮しウエスト部分に沿って簡易的に装着するだけのC字型を採用した。さらに、左足部を入れた後に板を外しやすいよう、板に装着するカバーには滑りやすい素材を用いた。

他の場面でも上肢の操作性低下が動作に長時間を要する原因と考え、工夫を行った。まずリハパンへパットを予め装着したことにより装着時のパットを挿入する手間が省け、リハパンとパットの引抜きでは、引抜き動作を2回から1回へ減らすことができ、疲労感の軽減に繋がった。リハパンの横を切る動作では、予め切り込みを入れ容易に切れるよう工夫したことで、時間短縮が図れた。

破棄では転倒が増え介助を要していた。これは、姿勢異常による全身の過緊張から安定性限界が狭くなっており、この中において右上肢を前下方へリーチしゴミ袋を操作しているため、バランスを崩していると考えた。これに対し、トイレ内のゴミ袋を蓋なしの箱に変更して操作を容易にし、さらに位置を近づけリーチ範囲を狭めた。この環境調整により転倒がなくなり自立に至ったと考える。

[参考文献]

1) 塚原正志, パーキンソン病, OTジャーナル, 2012, vol46. no7, p886-888.